ぼちぼち
点点の会①

美術家のコイズミアヤが発行しているフリーペーパー『点点』を起点に、
美術やその周辺の話題について雑談をする会の記録です。
今回は読者の高橋亜紗子さんからご連絡を頂きました。
短編映画祭の音声ガイドを作る企画に盲の方と携わった経験をめぐって
2021/3/13 に長岡市の工房このすくで 4 時間あまり会話をしました。
その記録をだいぶ要約してですがまとめました。

『点点（ぼちぼち）』vol.3 付録　「点点の会①の記録」
音声ガイドをめぐって

2021 年 5 月 10 日発行　発行 コイズミアヤ
2021 年 6 月 3 日 2 刷　coizumi@sf7.so-net.ne.jp
https://twitter.com/coappi

点点の会①音声ガイドをめぐって

点点の会①出席者（新潟県在住の方々）
I ―飯塚純・アーティスト
O ―岡谷敦魚・版画家
K ―コイズミアヤ・点点発行人
T ―高橋亜紗子・音声ガイドをつくった経験者
H ―広川智子・陶芸家
Y ―矢尾板和宣・グラフィックデザイナー

K　『点点』は話題がぼんやりと広くて、もし何か興味を持ってくれる人がいたらと思っていたところに、高橋さんが応答をくださって今日の会を開くことになりました。点点 vol.1 で触れた、伊藤亜紗さんの『目の見えない人は世界をどう見ているのか』（※1）について。私は昔は疾患も含めて精神的なことに興味を持っていた時期がある。目が見えないなど、人のエラーの部分が一度世界がリセットされてどう組み立てられていくのかを見る視点になるとは思っていたけれど、福祉に関わる経験がなく、そういう部分に触れるのは難しかった。盲目のブランクーシは勝手にぼんやりとした勘違いだったから言えてるところがある。そこからこの伊藤亜紗さんの見えない人とのオープンなやりとりを読んだのは良いきっかけになった。高橋さんから今回の目の見えない人のための音声ガイドについてのお話を頂いてとてもナイスなタイミングと。

T　私は青森の八戸生まれ、育ちは札幌。本を読んだり映画を見たりだけではなかなか自分の中に入って行かなくて、何か興味があったら、一緒に働くか一緒に暮らすしかないとずっと思い込んでいました。

学生の頃から色々なところに転がるように移住したりして過ごしてきた。自分とは違う文化や感覚を持った人と出会うことで、自分の中に生まれていく余白とか「なんだこれよくわからない」という感覚が好きなのかも。『点点』のたたずまいと「盲目のブランクーシという言葉」に惹かれました。私はブランクーシの画集を見たときに、自分とは違う時間軸の人だなという印象が。

K　多分、美術史の中でもブランクーシの彫刻ってへんてこりんな感じがして、といっても私は美術史をちゃんと勉強してなくて、デュシャンと仲良しだったの知らなくて。ブランクーシの印象として、ルーマニア出身で、素朴な格好をして髭もじゃで仙人みたいなイメージでいわれることもあるのだけど、デュシャンと関わりが深いと思うとイメージが変わる。ルーマニアの民族的な感じだったり、土着の宗教的なイメージの方に持っていく、宗教学者のミルチャ・エリアーデとかはそう評価していたりするらしいのだけど（※2）、割と最近日本語訳の出たオクトーバー派という美術評論の人たちの本（※3）だとそのことには触れられてなくて、デュシャンとの関わりが多く書かれてたりする。

Y　マン・レイとかですか？

K　マン・レイからは写真を教わってるんですよね。デュシャンが「プロペラにかなうものはない」みたいに言ったところからの「空間の中の鳥」だったり、網膜を喜ばせるものを否定するというのと、ブランクーシが見ないでつくってるんじゃないかと私が感じたのと重なるのかなとか。現代美術の先駆者みたいなデュシャンと、ルーマニアの仙人みたいなブランクーシだと重ならないんだけど。ブランクーシが工業製品的にステンレスをピカピカに磨いたり、手彫りで彫ってる手作業的なものと、製品的に作るものがあったり。俗物的に感じられる面もあったりして、流行のパッチワークのようでもあり。そんな感じが不思議な時間軸というか、どこにも収まりがつかないような印象を与えるのかなと。サティと交流があったとも。

T　（点点の）ブランクーシに惹かれてコイズミさんに連絡して、自分の中で目で見る／見ないに関連して音声ガイド（※4）を作成した体験が浮かんできて、その時のことをメールで書きました。

H　『阿賀に生きる』の音声ガイド付きを見たことがある。

T　私が関わった音声ガイドは、映画を見るときの音声のガイドのことなのだけど。映像とかセリフに被らないように、凄く短い尺の中で視覚的な情報を伝えるものです。「ここにコップがあります」とか「ここに女性がいます」といった情景を断定してしまうような言葉ではいけなくて。何かを観る（見せる）時は見る人の感性の邪魔をしないように気をつけて、伝えはするけれど、断定的になってはいけない。例えば「女性が下を向いて座っている」と、「髪の長い女性が目線を下に向けて想いを巡らせる」だと、同じ情景を伝えていても、受け取り方の奥行きが違ってくるというか。

少しインターネットで調べてみたら、２０１６年に音声ガイドつきの日本語字幕のついている映画は日本に7作品しかないくらいだったみたい。その後に総務省が進めて、２０１７年には60作品に増えたという記事を見ました。UDCast（※5）というアプリも出ていて、映画の音声ガイド対応の映画も増えています。

私がこの音声ガイド制作の企画に参加したのが２０１２年だったので、世間では本当にまだ認知されていなかった。札幌に国際短編映画祭というのが２００６年からはじまっていて、全世界１２０カ国くらいから現時点で多分一万二千本くらいの映画が集まっていて、アーカイブもあるし、マーケットにもなっていて買える。45分以内であれば複数出品できる。札幌の複数の施設で数日間にわたって上映される映画祭。札幌市の企画する生涯学習と結びついていて、子どものワークショップがあったり、教材として取り入れたりもしている映画祭。

私が参加した２０１２年に、この映画祭としては初めて、出品作品に音声ガイドを付けて上映してみようという企画があった。「オオドオリ大学」という街を学びの舞台として土地にゆかりのある人達が先生になって授業をするというＮＰＯなのですが。そこの企画に声を掛けてもらって参加しました。

音声ガイドの作り方は、字幕を作るような感じで、15分、20分の映像を30秒～1分位づつに割り振られていて。2～3人の盲のアドバイザーの方がいて、全盲や、弱視の方とか見え方もそれぞれで。私も含めて6人くらいの参加者がいました。

東京でプロとして活躍されている松田 高加子さんが指導で入ってくれました。松田さんはもともと、映画配給会社にいらっしゃった方で、視覚障害の方と映画を楽しむボランティア活動をされていました。日本で唯一の音声ガイドや字幕付き上映を常時行う、ユニバーサルシアター CINEMA Chupki TABATA（シネマ・チュプキ・タバタ）の立ち上げをした団体にも関わっていて。日本映画の音声ガイド作成にずっと携わっている方でした。松田さんが音声ガイドの活動を始められたきっかけは、近しい方が後天的に見えなくなった人で、「見えない自分は映画館から拒絶されているように感じた」という話があって。自分が大好きな映画が大好きな人を拒絶しているようになるなんて。楽しみたい人がいるならば楽しめる場が出来たらいいなと音声ガイドを本格的にやろうと考えたときききました。彼女はその後音声字幕の学校に通って、今はプロとして活動されている。彼女とのやりとりの中で、新潟でも音声ガイドしてみたいと思ったことがあって、シネウィンドの井上さんに相談してみたりとかもあったんですけれども。長岡にも「長岡音声アシストの会」っていうのがあったことを聞きました。２００３年からやっていたらしくて、長岡のアジア映画祭の出品作品に音声ガイドを付ける活動をされていたという記録を見ました。

O　「音声字幕」って何ですか？

T　音声ガイドは視覚情報を補う音声のガイドのことで、音声字幕は聴覚情報（セリフなど）を字幕で補うサービスで、対応している映画には「音声ガイド」対応、「字幕ガイド」対応のマークがついています。

O　テレビには「副音声」っていうのもありますね。テレビの副音声は撮影時の裏話を伝えたりするものだったり。カテゴリーが色々あるような気がして。

I　うちの祖母はテレビを見るときに、耳が遠くなってきたから字幕を出していて……。「みかこがドアを開ける。ガチャ」字幕が出てて、さらに音声でも「ドアを開ける音、ガチャ」という副音声が流れる。本来、ガイドってどのような役割ですか？

T　補足的なものがガイドです。

O　テレビのは質が良くなくて、説明的で機械的なもの。

I　音声もＡＩみたいに機械的なもので、映像を説明していて…無音っていう状況は長くはないからずっと状況説明みたいな音声が流れ…さらに画面をチラッと見ると、ものすごい文字量なんですよ。

亡くなった祖父も生前、だんだん耳が遠くなって、爆音でラジオ聴いたりしてたんですよ。話すときに言葉も出づらくなってきて、…現実のイデアの影を追わずに「あれ」で済ます境地。本人はわかっていても、伝える言語は失われてるみたいな。

O　音声ガイドって言葉のことなんですけど、音ガイドでもいいのに「声」という人が発するものが前提になっているのが何で？とも思うのだけど。

K　でも声でないと言葉は何で伝えるんだろう？

最近私はヨガ動画を見ながらヨガをやっていて、ヨガの言葉って呼吸にも働きかけたりするから話しかけるタイミングが絶妙で、非常に暗示が効いてくる。寝る前のヨガだと屍のポーズとか、段々体が重くなって沈むとか言われると本当にそういう感覚に陥る。

O　音声ガイドは声じゃなきゃダメだと思うんだけど、そこに強く意図を感じる。

K　昔フジテレビの深夜の「音効さん」という番組があって、テレビ局で音をつくる話でドアが閉まる音とか、雨の音とかが、実際の音よりも作った方が効果的だったりするというのがあって。30年くらい前かな。だからただの生の声ということではなくて、クリエイトするというか、効果を持たせる、言葉を選ぶ、それがノイズなくすっと入り込めるように伝える術っていうのはやっぱり一工夫というか何か専門的に必要なんだろうなって。

I　美術だと、小泉明朗さんって作家さんが好きで…「お母さん」っていう作品があって。齟齬が生じる仕組みを使って視覚と聴覚、知覚というメディアについて考えさせられるこの作品を思い出したな。

例えばウイリアムズの詩を日本語訳で読むじゃないですか。翻訳で読むとその詩を本当には読んでいないのではないかと思ったりする。映画『パターソン』の話で、誤解することによって直接触れられるようになるのではないかと考えたり。音声ガイドもある種の翻訳、受け取るまでに誤解され続けるという性質があるのかも。

T　アールブリュット（障害とアート）にもそういう面があるのかなと思ったりすることが。作者自身が（作品が）どう見られるかについて選ばないというか、作品として作っていない？みたいな。それを人に見せる、展示しようと思う人達によって作品として扱われることもあるのかなと。

I　アールブリュット展を見たり関わったりして、作者にとって制作は生活の一部で心地よいからやっているという感じなのに、評価する側は衝動的な要素を強調したりして、少し乖離があるのを目の当たりにしたことも。

H　作品を受け取る側との間には、フィルターというか、ここに色々ありますよね。かたちがだいぶ変わりますよね。

O　そこの間こそメディウムというか、伝えるべき部分のような。

K　間は見えるようになっていて欲しい、経緯みたいなことが少しわかった方がいい気がしていて。出来上がったものだけを見るべき時もあるけど。よくいわれるような作者の意図はあるのか？それはだいぶ圧縮されてしまっていて、もっと解きほぐせるというか。例えば、非常に自分の作品について我が強くものを言っている人がいたとして、でも実はそれは本当に我なのかというとちょっと違うというか、作家は、作品とかこれから表出されようとするものに奉仕している奴隷のような存在だったりして。そういう誤解をなぜ解きたいかはよくわからないけれど、もっと気持ちよくものを作ったり、つくられたものを受容したりするのに知られたらいいなと。

アールブリュットでは、よく作者本人は作ったあと制作物に執着しないと聞くし。

I　凄い大作もつくったあとに壊しちゃったりするんですよ。

K　作者と別の人が展示することに決めた、誰がどうやって展示することになったのかとかも、良い悪いではなくて、まな板の上にのっけて平気な感じになったらなと。

I　作品について語り直した人が見えても良いなと。親御さんが見出す、ファウンドアートのようなもの。まあ色々と複雑な部分でもあるのだけど…。

T　作者以外の人の伝え方で、違う作品とか見えない部分が見えたりするのもおもしろいなって。

Y　最近はラジオで「音の風景」という番組が凄く気に入ってて。ただ街の音が流れているだけなのだけどたまらなくて。らじるらじるで。最近永平寺の夏、秋、冬ってあって、視覚で見ても興味がわかなかったのに、音だけ入ってくると凄く気になって、一生懸命検索して見たり。音だけ聞くと興味をかき立てられる。

H　昔は本は自分で読んでこそって思っていたのだけど、最近は朗読がめっちゃ好きになって。読むのは朗読に任せてて、イメージがわきやすいというか、視覚的なイメージを想像する方に集中する感じ。

ラジオが大好きで、声を聞いていて勝手にその人の姿形を想像する。でもだいたいテレビに出てるのを見たりすると全然違う！

I　音声ＳＮＳが今流行ってきて、クラブハウスが日本にも上陸したけれど。音声系のアプリが2年くらい前から日本で流行ってて。人々は視覚に疲れて音の時代になったのかと。

Y　ポッドキャストとかよりラジオの生感が好きで、合わせちゃいますね。リアルタイムじゃないと気持ちが付いていかないというか。

H　ＮＨＫのラジオで一日中レコードを流す日がありますよね。三昧。祝日のＮＨＫ ＦＭです。

I　意図してないノイズとか、余計な要素に意外と人は感動する。プンクトゥムという感覚概念をロラン・バルトは言っているのですが、その視点をどこまで訴えかけて良いのか…逆にＡＩみたいな無機質なものを介し、イマジネーションによって感動が湧き上がるのかっていうのが今後議題になりそうだなって思いますね。

K　映画を音声ガイドにするときに、情緒的なことにどうアプローチするのか凄く気になります。

T　主観を入れないみたいな感じなので。

K　視覚的には、映像にはムードみたいなものがあるわけじゃないですか、情緒に直接訴えかける手前か、訴えかけてしまってるものについて、間合いとかでもあるとは思うのですが、そこにどういうシーンが差し込まれるかで凄く変わってくるだろうなと思って。ずっとワンカットか、場面がパッパと変わるかとか視覚的なテクニックを使って構成されているわけだから、それについて説明すると無粋なことになるし。監督の意図をどこまで汲む、または切り捨てるのかとか、そういう判断って難しいのではないかなと。

T　自分が（音声ガイドを）つくったときは、伝えたいことをどういうふうに感じてもらうかを確認しながらしました。思ったように伝わらないという面白さもあったと共に、自分が普段使っている言語の見直し、掘り起こしに行くっていうのが楽しかった。使用する言葉によって、世代によっても伝わる／伝わらない言葉があって。音声ガイドがつくられるようになったはじめの頃は、映画の作者と音声ガイドをつくる人とは別だったけど、最近は音声ガイド制作の現場に入ってくる監督も出てきている記事をネットで読みました。

K　きっと、監督にしたらそれ面白いんじゃないかな。ちょっと層をずらして翻訳されるようなことに。特に説明しなくても編集の時に指示すれば良いようなことが、言語化されるみたいな。

O　言葉っていうと意味を帯びちゃいますよね。でも映像だと意味がない状態のものなのに、言葉にすることによって意味化しちゃうことの葛藤というか。

T　また、尺もあって、目だと一瞬で見れることで、意味も持たせてることもあるんです。それをどこで伝えるか、全部を伝えるのではなくて、要所要所で言っていくとか。

O　主観を入れないということが気になってるんだけど、監督に沿わせるために自分の主観を入れないということなんですか？

T　基本は見る人に任せる。

I　Siriに答えられない質問をすると、詩的な返答が返ってきたりする。音のサイン波だけで作品を作ってるアーティストがいて、聴いてるとなぜか泣けてきたりして、無機質なザーって音も聴き続けてると逆に情緒が沸いてきて。そぎ落とせばそぎ落とすほど、別のメッセージを受け取りやすくなるところがあるんじゃないかな。

H　音声ガイドは、形容詞とか感情的な言葉を使わずに、説明的なものということなのですか？

T　「美しい」とかは入れないけれど（美しいと思うかは人それぞれなので）情景の説明はあって、空の色で監督がなにか伝えたかったろうなと思えば空の色を伝えたりして、（盲目の）アドバイザーの人に聴いてもらって、「あ、でも色のことはよくわからない」と返されたりとかして、そこからまた伝える言葉を掘り起こしたり。

I　色がわかるのかってこともあると思うんですけれど。小学校の時に体験で目隠しして歩くみたいな授業があったのですが、これでわかった気になっちゃいけないなとどこかで思っていて。アールブリュットで関わっていても、絶対にわからないという前提を受け入れ、だからこそ歩み寄る意思が大切だと思ってる。

Y　色ってどういう風に感じるんですかね？

K　伊藤亜紗さんのこの本には、全盲の人も色々聞いている情報から、赤はこんな色だろう、黄色はこんな色だろうというイメージ、概念はあるそう。ところが、混色がどうしてもわからないんだそうで、赤と白を混ぜるとピンクになるみたいな変容が説明してもイメージできないらしい。

O　例えば、空の色と火の色を混ぜても紫（のイメージ、スミレ）にならないもんね。

H　意味を混ぜることは出来ないものね。

Y　僕も絵具の混色はわかるけど、光の色の混色はよくイメージしにくいものね。

I　『メッセージ』という映画を見て、言語学者が宇宙人のメッセージを解読しようとする映画なのだけど、（ネタバレしちゃうので、面白いので見て下さい）身体と言語が一体化してて。

T　音声ガイド作成時に、視覚障害を持つアドバイザーの人に作成した音声ガイドを聞いてもらって感想を聞きます。私は「見えない」ということがどういうことかわからないところからはじめたわけだけど。次第に私が見ているものを伝えても伝わらないけれど、「私が見てないものを見えている」というか。返してくれる感覚が自分と違うというのがわかって面白かったですね。自分が持っていたけど固く閉じていた感覚を人に拡げてもらったみたいな経験だったんです。

H　公衆トイレやＡＴＭに行くと点字があるじゃないですか。よく触ってみるんですよ。全然わからないじゃないですか。これを文字として読めるって凄い感覚だなと驚きますね。

K　最近コロナで人の流れが変わったので、全盲の都市生活者の人が凄く困っているというニュースを見ました。横断歩道で沢山の人が渡る気配があったから、今青なんだとわかったり、同じ時間に店の前で行列が出来てるとか、客の出入りがあるなどの状況が、人出が減ってすっかり変わってしまったと。

T　10代後半で失明の心配があった時期があって、日中一定の時間に目をつむって過ごしてみるというのをしたことがあって。人と向き合ったときに視覚的に威圧感がある人がいるとして（怖そうとか、怒ってそうとか）。でも、目をつむって向き合った時に、丸いとか、とげとげしてるとか視覚情報とは違った感覚を受けたりして面白かった。そういうのを遊びとしてやっていたことがある。

Y　ラジオで国会中継聴いてて、声の質でこの人はいい人だなって思って検索して見たら、めっちゃ悪そうじゃんみたいに全然違うことがあって。

H　でも耳からのイメージの方が合ってるかも知れない。

T　視覚的な人と、聴覚的な人と、触覚的な人っている気がして。視覚に頼ってる人は耳からの情報の方が、多くがそぎ落とされた分、本来の感覚で受け取れたりするのかなとか。耳から良く聞いている人は逆に、目からの情報がフレッシュだったりするのかなと。

O　触覚的な絵描きって居るので。

H　ろくろひいているときは、割とよそ見しながらやってるかも知れない。厚さとか形とかだいたい見なくて。

O　銅版画でインクを拭き取ってても、油膜が付いているかどうかって、拭き取ってふっと軽くなっていくって感じなので、見てないですね。

I　写真の現像でも、モノクロの場合はセーフティライトっていう赤いライトをつけることができるんだけど、カラーの場合は真っ暗じゃなくちゃいけなくて。（昔ながらのやり方だと）紙がどこ、スイッチがどこ、何歩歩いたらということを一回頭に入れて、真っ暗な中で焼き付ける。真っ暗な中に長い時間、その場所にいる。長い工程を経て、イメージが現出しはじめて「見る」ものが写真なんですよね。それを体験したときに、現代のデジタルだなんだという写真の文脈から離れて、もう「禅」みたいな感じ。これずっとやってたら、ここ（技法）から離れがたいなと。

T　想像するといい風景ですね！

I　待ってる間は映ってますようにって祈るだけですね。

H　現像を自分でやらなくても、撮ったフィルムを写真屋さんに持っていって、数日後に受け取りにいくだけでもドキドキしてて。自分で撮ったつもりの記憶しかなくて、期待して見るときのわくわく感ってありましたよね。

Y　だいたいがっかりするんだけどね！全然違う！って。

K　最初の個展の時、会場撮影にはよくわからないなりに35㎜のリバーサルフィルムで撮ったのだけど、プロラボに出して出来てくるまで時間がかかるから、あんなに写真を撮るのに緊張することなかったな。

Y　これ逃したらまずいぞって変な汗かきますよね。

I　フィルムの時代をやってきた一線のフォトグラファーが、目つきが違うのはそれが理由かなと。殺し屋みたいに対象を外さない！巨匠についていたことあるけどやっぱり目つきが違って、一瞬に全て集中するっていうね。イメージを逃さないという時代から、量産されていくデジタル・イメージというものをどう扱うかって時代に変わってきてるのかな。

前職広告制作関係だったんだけど、印刷で出してくれって言われたとおりの色を出すと、もっと青くってと言われたりする現場を見て…人は見たい色と数値化された正しい色の情報が違ったりする。さっきの音の話だと、リアルな音を録音するより、映画の音の方が聴きたかった音に近かったり。効果音を作るフォーリーアーティストっていうのがありますよね。人間は本質を伝えたから良いんじゃなくて、見たいものを見たい、聴きたい音を聴きたいということがある。つい誤訳を伝えてしまうもそういうことにつながってるのかと。

Y　最近翻訳の映画が吹き替えの方が好きになってきて。吹き替えの声に入り込んでしまって、実際の俳優の声を聞いたら、え？こういう声なの？って違和感があったり。

K　洋画が吹き替えになってると喋りがオーバーだったり。日本人が思う西洋人が盛ってある。もとの声だとみんなとても静かに喋ってる。

Y　若いときは字幕の方が正しい感じがしてたのに、この頃は吹き替えに慣れちゃうと、盛ってないと寂しくなってなって。ドクターフーっていうドラマで吹き替えで慣れて、続きを字幕で見たら我慢できなかった。

O　声優さんが変わっちゃったときの違和感に近いんだよね。

Y　元のものを再現しようっていうことはあると思うんですけど、聞きやすくしよう、っていうことも重要なのかも。声優さんの職業魂がそこに入ってる感じがして、聞きやすいんですよね。（声優ではなくて）俳優さんがやった吹き替えって、全然よく聞けないなっていうのがあって。特別な訓練があるんだろうなって。

I　バラエティ番組で（画面に）文字がよく出るようになったけど、あれいつからですかね？ YouTuber の人が実験したけれど、字幕のないものよりあるものの方が再生回数が多いんですよね。YouTuber の人達みんな文字を出しますもんね。

H　でも、その文字が出ることによって画面の中で隠れてるものがあるわけじゃないですか。だいたい邪魔って思っちゃうんだけどな。

I　吹き替えと字幕を同時に見るの気持ち悪いですよね。たまにちょっと言葉が違う。全部ぶれてきて気持ち悪くなっちゃう。

K　字幕と吹き替えと翻訳者が違いますよね。文字表現と口語表現が違うんでしょうね。

Y　宇宙人が出てきて、違う言葉を喋ったときに字幕が出る。ドクターフーの話なんですけど、字幕がぱっと出ると、どこからが言語なのかちょっと違和感があったりして。

I　ピクサーの映画とか見てると、日本上映の絵の中で看板の文字が日本語になってるのか逆に違和感がある。洋風の世界観の中に急にひらがなの文字が出てきたり。

H　それは親切すぎますよね。

Y　それもあんまり書体がないからなのか、ポップ体なんですよね。「ん？」ってなりますよね。

I　子どもながらに外国の世界観はわかりますよね。むしろ世界観を損なわないで伝えてった方が良いんじゃないかと。文字情報を入れることだけが優しさではないような。

T　私は子供向けの洋画見ててもその文字のことは気にならなかったので、人によって違和感感じたり、強い感覚って違うんだなって思いました。

I　厚切りジェイソンが好きで、自分でも日本語のおかしいところを考えてみようと思ったことがあって、時間だと未来のことを「この後でね」と言い、過去のことを「この前ね」って言う。自分が進行するときに、前方方向が「前」で、後ろのことを「後ろ」っていうからとてもややこしいなと思って。英語だと front と back、past と future じゃないですか。全然違うものなのに、日本語だと同じになってしまっていて。

K　空間的な紐付けが逆になってる。前向きに生きようとか、後ろ向きに考えるのはやめようと言う時には一致してるような気も。でも時間軸で逆転していることもあると。

O　気持ちの前向き後ろ向きは時間の話じゃないんじゃないの。

H　後ろが単に後ろなのに、なんで解釈がネガティブになるのか。

T　新しい言語として日本語をおぼえる人はそこ困りそう。

K　この本（※1）に戻ると、見える私たちは目が前についているから空間的に前後（表裏）ということに非常に敏感なのだけど、目の見えない人はそこはもう少し曖昧というか、前後のない世界に居るようなところがあると書いてあった。前後があるという認識は視覚的な認識から来てるみたいで。向こうに居る人がこちらを向いているというのは視覚的にはとても強いメッセージだけど。見えている私たちは視野の前面のことしか見てなくて、後ろのことは気にしてないけれど、見えない人は全方向的に存在しているというか、空間感覚が。空間は抽象的にとらえられている。

H　それはブランクーシが目が見えないというイメージにつながるのかも。

K　抽象ということを視覚的に形を単純にしていく、さらに進んでいくと色彩だけになるとか、視覚的な縮減によって抽象と考えられる面があるんだけど、ブランクーシは丸くするとか、シュッととか、金属磨けばピカピカになるといった感じで視覚に頼らずに抽象化してるように感じた。それに比べると写真を撮ってる時は、非常に見て写真を撮っているような感じがしてきて、そのギャップが面白いなと。（盲目の勘違いは）弱視なりに一所懸命見ようとしているのかなと想像してた。

I　視覚的な快楽に頼らないデュシャンと一緒に居るってことが面白いってことですね。

K　写真は独りでこっそり撮ってたみたいなことを夢想してます。

――休憩――

Y　眠りに落ちるときに思考が切れる音のようなもの聞こえるんですけど、聞こえますか？なんかザザっと音がしてその瞬間がわかることがあって。昼寝とかして、夜にまだ体力が余ってる時とかに意識が切れる瞬間がわかることがあって、ザザっザザザっていうんです。

T　ザザザザはないですけど、音が切れる、聞こえなくなるときに眠りに落ちるんだなって感じることはあります。

I　目覚めたときに、目覚まし時計が鳴ってるのにしばらく耳に入ってこないときがあるんですよね。ぱっと

起きて意識がもどった時にテレビの音が聞こえるようになったりという経験はありますね。音に気付くまでに時間がかかるっていう感覚。

K　そろそろ音声ガイドの音を聴いてみますか。

T　以前『目で見ない映画上映会』（※6）というのをやったときには、音声ガイドと映画を合わせて上映して、来場者の半分の人には見えない状態で音声ガイドを利用して見てもらって、残りの半分の人には映像もガイドも合わせてフルで見てもらった。今回は映画自体はなくて、音声ガイドの音だけです。今回は半分の人に耳栓をしていてもらって、聞いた人はそれを視覚的に聞いてなかった人に伝えてみるというのをやってみようと思います。見た（聞いた）人によっても、出てきた映像って多分違うと思うんですよね。実際は映画の音とかセリフとかが入っているのですが、今回はそこが空白になっているので、それぞれがそこも補完するということになります。半分づつ交代で。

Y、O、I　が先に聞く側。
K、H　耳栓

【音声ガイド】
朝、かおる子の部屋。
歯磨きしながらスプレーしまくる。
ハンガーのワンピースにも。
匂いをチェックする。
卓上鏡、化粧をはじめる。
口紅を嗅ぐ、仰け反る。
タイトル平仮名で「びじょ」赤い背景。
市電の乗り場、5人横一列。
右端にかおる子、左端に酔っ払いが並ぶ。
臭がる隣の女性、いちばん遠いかおる子も臭がる。

混み合った車内、立っている黒いワンピースのかおる子。
窓の外に治療院の怪しげな看板。
前に座っている女子高生がコロンを使っている。
匂いにむせるかおる子。
ハンカチで鼻を覆い、逃げるように車内を移動する。

酔っ払いにぶつかる。
絶望的な表情のかおる子。

T　ワンシーンでも物語でも、伝えてもらったら。

I　記憶の問題があやしい…

O　僕が受けた印象は、とある朝のワンシーン。多摩ニュータウンみたいな新興住宅地のところの若い女性が通勤していく朝のシーンを描いたもので、バスに乗って通勤していくような感じなんだけど、たまたま酔っ払いみたいな人が出てきて、普段とちょっと違う、それと共に外に診療所がちらっと見えてくるのだけど、酔っ払いとの絡みや、怪しい診療所が見えるのが、非日常の物語が繰り広げられそうな予感がする。日常が嫌悪的なものになっててそこから逃げるような非日常の診療所が出てきて、次なる物語の展開を感じさせるような場面を描いたシーンのように感じられました。

Y　ちょっと夏休みの朝みたいな感じで、お出かけする女の子、かおる子さんが出てきて、異性に会うのかな？ファブリーズか何かでこれから自分が着るものの匂いを消しながら歯磨きして、それから出かける。とにかく酔っ払いがちょくちょく出てくる。治療院がさっと見えたりとかして、でもやっぱり臭いで目の前の現実に戻されたりして、また景色が見えたりして、「怪しげな治療院」って言ってましたね。そういう怪しげな雰囲気もありつつ、普通の日常の景色なんだけど、爽やかな朝ではないシーンですかね。

I　僕は美大時代では映像メディアデザインの出身なので、自分がこの物語を作るとしたらどうするかなと想像するとかなり主観が入ってるんですけど、バッと鮮明に東京が映るんですね、で、クローズアップしてマンションの窓まで行きます。一人の女性がシュッシュッシュッと除菌消臭スプレーを服にかけているシーンからはじまったんですね。次の瞬間酔っぱらいの話になるんですけど、どういうことかというと、昨日居酒屋で飲んでいたシーンが回想シーンになるわけですね。だから消臭スプレーをかけていたと。回想していて何人席かで飲んでいて、一番奥の部屋かに酔っぱらいがいて、帰り際かなにかにぶつかっちゃって、その方を怒らせちゃったんですね。かおる子さんは凄く嫌な思いをした。語らないのだけど、シュッシュかけながら昨日まじ最悪だったなっていうのを思い出している。回想だと思ったんですよ。通勤する最中も誰かにぶつかったりしていて、嫌な気持ちになって、バスか電車から診療所が見える。「私もう田舎帰ろうかしら？」って思うワンシーンなんじゃないかと思っていて、これは田舎に帰るOLの話。

O　凄いな!! なるほどね。臭いに敏感な子なんだね、きっとね。

I　臭いって記憶と密接じゃないですか。お酒の臭い、居酒屋の独特の揚げ物の臭い（の残り）を朝嗅いだときに、昨日の嫌なことを全部思い出しちゃったっていうのがあるんじゃないですかね。

O　確かに臭いを消したい、だったね。

I　自分が監督だったら、コンセプチュアルなことって冒頭入れたいじゃないですか。消臭スプレーで全部無くしたいとか、故郷に帰るじゃないけど、汚れちゃった私の心を流したい。

O　気になったのは突然のごとく「赤いバッグ」って言ってて

I　赤いバックっていうのは、カバンのこと言ってるのか、背景のこと言ってるのか…。

Y　そうだ、赤いバックって言ってて、当然のごとく赤い背景だと思って赤いクレヨンとろうと思ってたのにもう忘れてた。

I　赤いバックと赤い口紅って言ってた。

O　割と派手目なんだよね。背景が赤いイメージが出てきたけど、鞄か!?

I　そういう微妙な言葉もわかりづらいってことがわかりましたね。赤が象徴されるシーンで。

O　人に対しても嫌な顔をするみたいな

I　こうやって話してると何言ってるかわからないですよね？

H　や、すっごい具体的!!

I　それは、結構僕の主観が入ってるからですね。

K　想像たくましいね！

T　全員終わってから実際のあらすじを伝えますね。続きから交代して。

【音声ガイド】
かおる子。
仰向けに倒れる酔っぱらい。
立ち上がって近づく。

オフィス。
漂うタバコの煙。
鼻にハンカチのかおる子。
社内禁煙の貼り紙を指差す。

渋々火を消す。

脇の臭いをジェスチャーする先輩。
不安げなかおる子。
ナイスポーツの営業マンと打ち合わせ。
笑顔のかおる子、しかめっ面の社長。
頭をかく営業マン、脇汗ぐっしょり。
オエっとなる社長、かおる子を見て怪訝そう。
営業マン、両手を突き上げる。
吐きそうになる社長。
驚く営業マンとかおる子。
社長取り繕う、お茶を勧める。
かおる子、お茶を飲む
社長、苦しげに立ち上がり、かおる子に声を掛け、背中をポンと叩く。
むせぶかおる子、つっぺした種が鼻から飛び出る。
写真の女性のバストに種二粒。
営業マンと社長、共に視線をゆっくりと上げる。

微笑みの消えたかおる子。
ゆっくり目線を上げる。

T　終わりです。（映画は途中だけど）

K　………シュールすぎる！

O　え？こっからシュールになるの？

H　とりあえず聞いたままを話すと、まず最初はまだ通勤のバスか電車に乗っていて、酔っ払いが倒れて、それを助けにかおる子さんが立ち上がってというところから場面転換して、会社に着く。社長さんがタバコを吸ってて、ここは禁煙ですよって会話ではなくて貼り紙を示して教えてあげて、社長がチって感じでタバコを消すと。そこから、営業マンが入ってきて、すっごく若い営業マンで、汗びっしょりで、社長がその営業マンがめっちゃ臭うと顔をしかめる。かおる子さんと会話をして何か良いことがあったのか、両手を挙げてガッツポーズすると、脇汗ぷーんと臭って、社長の具合が悪くなる。そこで終わったかな？凄く臭いがポイントなんです。とにかく社長が臭いに敏感で。

K　でも、社長は最初タバコ吸ってた。

H　かおる子さんは社長のタバコの臭いは気になったけど、営業マンの臭いは気にならない。社長は具合が悪くなるくらい気になる。

K　最初は酔っ払いが倒れているところを助けに立ち上がり、次はすぐオフィスだった。タバコの臭いが嫌だなと思ったかおる子は、ここ禁煙ですよ～みたいな。社長は渋々消して。なんとかスポーツみたいな営業と打ち合わせで、社長と3人で。その前に先輩に脇汗を気にするようにって言ってたのはかおる子なのかよくわからないのだけど。そのあと凄く間があったから、オフィスの中を移動するとかの場面転換があったのかな？で、3人で営業マンが脇汗ダーダーで、社長が気持ち悪くなって、吐き気を催し、いたたまれなくなって、後は任せるみたいな感じでかおる子の背中を叩いたら、かおる子は何か口の中に二粒入ってたの？？

H　あー！なんかあった！

K　なんか口から吐き出したら、バスト！バスト！何のバストだったんだ？何かのバストの上にそれが付いた。

H　なんかね、種が飛んだんだよ、種が！

K　背中を叩かれたら口から二粒飛んで、バストの上に！

Y　ベスト？

K　バストの上に二粒？乳首か？みたいな。バストじゃなかったのかな？

H　何の上に落ちたんだったかな？

K　なんかポスターだか何かのバストに二粒だから、それ乳首やんけ！と思って。凄いシュールだなって思って。それで微妙な空気が流れる。シュール過ぎる。いつその種を口の中に入れたんだろうって。

I　語られていない情報が出てきましたね。

O　種って何だ？

K　急にテンションが、これどんなテンションの映画なんだろうかって。コント番組なのか？みたいな。でも間が結構長いから、シュールな映画なのかなって思ったりとか。

I　そっか、コメディ的な場合もあるってことですね。シリアスなのを勝手に想像してたけど。

H　私もシリアス想像しました。

K　静かだからシリアスを想像するけど、ホントはテンポのいいコメディなのかも知れない。

T　この状態では初めてやったんですけど、凄い当たってる。ミノワシュンスケさんという監督で、もともとCMの映像をつくられていたというのもあって、テンポが速くて、シュールなところからいきなりコメディになったり。そもそもこの映画になぜ音声ガイドを付けようということになったのかというと、この主人公は嗅覚過敏の女の子のお話だったんですよ。どんな臭いもダメなので、除菌消臭スプレーを朝から手放せないという状況。舞台は札幌なのですが、出勤の準備を色々なものにスプレーをかけながらしていて、市電を待っている列に酔っ払いが来て、他の人が気付かない臭いがその女の子は気付いてしまって、というところからオフィスに行くんですね。タバコを吸っていたのは先輩なんですけれど、まさに営業マンが汗っかきの人で、主人公の女の子は嗅覚が過敏なので特に苦手で、種は、口ではなくて鼻につっぺ（※7）として入れてたんです。鼻栓をしてたんですね。耳栓をしてもらったからわかるかな？ってちょっと思ってたんですけど。

一同　あああああーー！

H　だから営業マンの臭いが気にならなかったんだ。社長は気にしてたけど。

T　ポスターっていうのはスポーツメーカーの営業マンなので、スポーツの写真、ユニフォームの写真があって、鼻から出たのが本当にバストのところに。でも当たって凄いなって。前に音声と音声ガイド合わさった状態でやったときは、疲れるっていう方が凄く多くて、っていうのも、この音声を見えないながらも自分の映像に変換しながら見なくちゃいけないっていう作業が凄く疲れるって。あとは音がどんどん流れていくから頭に残らないという意見が出たのですけど。

I　確かに！情報が整理しきれないですね、音だけ聴くと。

K　おぼえてられないよね。

I　因みに僕の言った回想ではないんですね。酔っ払いはどうなったんですか？

T　酔っ払いは実際の通勤時に一緒に居た。この後に酔っ払いが効いてくるんですよ。

I　あー、伏線になってくるという。

Y　診療所はどうなるんですか？

T　それも効いてくる。見るからに怪しい治療院ですけれど、そこで鼻を治してもらおうというところに進んでいって、最終的には治してもらわないということに。

K　聴いた印象は、想像していたよりも言葉で足す内容が少ないんだなと思って、でも少なくてもおぼえてるのがやっとだから、実際に他の音声も入っている状態で、見えない人が物語を組み立てる能力って凄いなって。音の情報から情景を想起する能力に長けてるのかなって。

I　いま目をつぶって聴く中で、頭の中で勝手に主人公を有村架純さんにしていたりとか、見たことある俳優さんとかで画面をなんとか構成しようとしたんですけど、それが無い、女優とかを見たことがない人の場合とか、どうやって再現するんだろう？ってふと思ったんですけど。

H　途中から見えなくなった人が、映画をまた見たいって意欲はあると思うんだけど、最初から見えない人が想像が、なかなか画像がっていうのが。

T　インターネットの記事で読んだのですが、長岡アシストの会っていうのはそもそもは図書館かどこかで読み聞かせか何かの活動をされていた時に、音声をつけて映画を見たいという視覚障害の人々の声があって、そこからはじまったそうです。最初にお話した松田さんも見たいっていう欲求があって広がって行った。見える人でも映画に行きたい人とそうでもない人に分かれると思うんですけど。

I　実際この映画のボリュームはどの位？

T　これは短編映画祭の映画なので、全部で多分20分位。今聞いたのはそのうちの2分。

I　相当辛いな。

T　みんなヘトヘトになっていました。

I　しかも頭の中で再現するから、映像をつくってる感覚と同じですよね。

O　登場人物の話だけど、僕は見たことない人が夢に出てくるの普通なので、想像したときに女優さんが誰かってことはあまり関係してなかったね。女性っていっても顔が鮮明じゃないし、赤いバックと赤い口紅でちょっと派手目だってくらいで、女性という概念の人が、赤い鞄を持っているだけっていう感じでイメージが出来ている。概念としてのキャラクターが動いてるってだけの映像。それで心地良い、ストーリーとしての面白さで。勿論カット割りはあるのだけど、僕には診療所を窓から見てるっていうシーンが印象的で、多分診療所が次なる物語になるのだろうという予感の話だから。だからビジュアルとしてははっきりして無くても、概念が動き回っているのをストーリーとしては把握できるなっていう感じがした。

T　今やってみて凄いなって思ったのは、私は見てもいるしつくったりもしているのでよく知っているんですけど、今聴いてもらったシーンにもこの監督は要所要所に仕掛けをするんですね。後で効いてくるような仕掛けをするんですけど、まさに指摘されたシーンがその監督が後に効いてくる仕掛けとしては一番大きい映像なんですよね。

O　この映画見たいよね、気になって。

K　私の頭の中では、最初オフィスのシーンとか殺風景な印象で、あまりできの良くないカラオケ映像みたいなイメージだったんだけど、背中を叩いた辺りから、コメディタッチの劇画になってた、アニメのような。

T　人によって変換が違うんですね。

K　状況がよくわからなくて、どういうテンションかで型にはまったような映像になってっちゃう。

I　僕、大学の学部で習ったことで、その映像の冒頭の中で、その世界のリアリティラインが決まるってことがありました。魔法の世界だったら、ここでは魔法はアリだなとか、現実ではなくても、この世界の中では常識とされている内容が冒頭の10分とか、タイトルが出るまでの間とかで把握できるようにしろとか言われて。物語の中でそのリアリティラインを打ち破るようなものも出てきていますよね。今回視覚情報がないから、設定が置けないと。

T　それは心地よくはないですか？

I　凄く混乱しますね。人によるかも知れないけれど。映画を見るってことはひとつのストーリーを見る、絵画とか余白のあるものとは違って、脚本があって道筋があるものだから、そこが迷子になっちゃうんじゃないかな。

H　もやもやもやもやしながら見たのは『カメラを止めるな』。怖い映画だ怖い映画だと思って最後までこうなのかなと思って見ていたら、最後に全部種明かし。もやもやしてるのはストレスなんですけど、最後のあ良く出来てる！がそれを消してくれる。

I　今まで物語の話だったけど、ドキュメンタリーだったらどういう風に見るんですかね？ドキュメンタリーって指し示したい情報と、余計に映ってる情報が表しちゃうものと両方映ってると思うんですよね。だからドキュメンタリー映像の情報を伝達するって、ものすごく大変だと思うんですけど。『ブレアビッチプロジェクト』とかだとブレとか揺れとかカメラが不安定なことも文脈に入ってるから、それを説明するのは大変。

H　私が高田世界館で見た『阿賀に生きる』では、要は今、ここは舟を作っているシーンでお爺ちゃんが居てみたいな最初のシーンで誰がいてこういう場面というのをぱっと言ってしまって、後は何もない。また場面変わると、冒頭にその場面の説明、あとは何もないっていう感じでずっと進んでいきました。あとはその撮っている音声に任せる。

K　考えてみると見えない人は見えない状態で暮らしているから、冒頭に状況だけ説明されてあとは音だけで、欠落している情報があってもそれがナチュラルな状態ってことなのかもしれないですね。補足的な情報っていうのはすごく不思議かも。普段は知らない情報を教えてもらってるっていうことになる。

I　要するに邪魔な場合もあるっていうことですかね、時には。自分は心地よく物語を展開していたのに、入ることによって迷子になっちゃう。

T　私達だって映画を見たときに受け取り方って色々で、海の色から何かを感じる人も感じない人もいるわけで、音声ガイドも受け取る人によって意味がすごく違うので、正解の音声ガイドはない。相手の解釈を邪魔しないようにといわれます。

K　主観を入れなくて、邪魔しないっていうのがどういうことか凄くよくわかった気がする。

O　基本的に映画っていうのは視覚と音で何かを伝えようとするメディアですよね。それを視覚のない人に伝えようとすると、例えばカット割りというのがそもそも視覚の言葉なので、はじめから視覚障害の人に向けて映画を作ろうって考えたら、映画自体はどういうものになるんだろう？って思ったんですが。

Y　ラジオドラマってありますよね。

I　ラジオドラマは想像できるし、落語はちょっと（視覚的な）演技が入っちゃうけど。

K　映画だと回想シーンがぱっぱと入ってきたりとか、時間を操作するのが特性でしょ。聴覚で生きてる人は時間を視覚的には操れない。視覚は制止しているっていう場面があるけど、聴覚的には生きてるペースで時間が流れていて、音楽も流れ去っていくけれど。ベタなかたちで、今は何日前です、現在に戻りましたみたいにやっていくのかな？

I　未来のシーンだと思ったのが実は過去でとか。視覚的に裏をかいた作品っていっぱいありますよね。クリストファーノーランとかは難しいですね。

T　今の作り方はベースとして目が見えるが前提なんですけれど、日本人の監督の人で、目で見ない映画を作られた方がいて、自然の音とかがすごく豊かな映画で、ちょっとタイトル名とか忘れてしまったんですが。
　私が音声ガイドをつくった時に、自分が感じていなかった感性で返してくることがあって、今の映画で音声ガイドをつくると映画には目が見えるという前提がどうしてもあるから、そちらに寄せるってなって不自然なことも出てきてしまうのだけど、もうちょっと音声ガイドが普通になると、目で見ないっていうのを前提としてつくる映画、視覚に頼らない作品が出てくるんだろうなとは思います。

Y　ラジオドラマだと、何々はなんとかのことを回想したと言ったりとか。なるべく無粋な表現はしないようにしているんだろうなっていうのは感じて、でも最低限そこは言わないとわからないってことは言ってるように思います。

H　ラジオドラマ、意外とSFが多くないですか？

Y　あ！多い!!

I　ラジオドラマって語り手がいるじゃないですか、メタ視点の。語り手が媒介して話せるから、その人が演じているということで聞ける。ヒッチコックもそうですけど、語り手が冒頭にいて。

O　あとは、僕たちが普段聴いている音というのとはちょっと違って、音に意味を持たせられるのかな？って。例えば回想シーンだったら、声優さんの声が若くなってるとか。音を豊かにしていくっていう話がありましたけど、まさに音を豊かにしていくことで伝えられることがあるかなと。

Y　クラシックをいいヘッドフォンで聴くと、どこに何（の楽器）があるっていうのがわかったりするじゃないですか。結構臨場感としてありますよね。

O　遠くとか近くとかね。

I　昔ジョイポリスとかで、音だけのホラーとかありましたね。バスのアトラクションでヘッドホンすると、バスの中で人が歩いていて、いきなり耳元で声がしたりとか。ラジオドラマでSFが良いのって多分、電子音とか飛行機とか宇宙人の声とか、音が反応しやすくて、体験ツアーを一緒に参加しているみたいな感覚になりやすいから。

Y　ラジオドラマそんなに語り手いなかったような気がするんですよね。結構セリフが多かったように思うんですけど。

K　考えてみたらSFを全部実写で撮ろうと思ったらすごい頑張らなきゃいけないのに、音声だけでよければ超低コスト。

H　人の想像力にすごい任せられる！！

I　聴覚に訴えかける映画って、映画っていうのか、「映聴」？「映音」？音の時代って言われてるから映画館じゃなくて特別なスペースに行って、みんなでヘッドフォンするとか、360度音で囲ってみんなで物語を見て、でもみんな絵を共有してないから、それぞれの映画が立ち上がる。落語的ですよね。落語って面白いのはオチがわかってても行くじゃないですか。そういうメディアになり得そうですよね。音がわかってても、聴く環境や語り手によって違う。

O　落語ってその人が出てきて、「えーー」って言っただけで面白いからね。

H　なんかわくわくして待ってますよね。私今日出てきた映画、『メッセージ』の原作（※8）文庫本で読んだんですけど、全然面白くなくて。

K　え、そうなの！？

H　きっと映画で見たら面白いんだなって。海外小説なんですよ。

I　僕はSFの大巨匠のフィリップ・K・ディックの文庫全部持ってるんですけど、めっちゃつまんないですよ。映像で見ると、監督の手腕もあって面白く感じるなって。

O　小説面白いじゃん！凄い好きなんだよね。

I　それぞれ一長一短あって、メディアの特性を活かした在り方を考えていった方が。逆に聴覚に訴える映画、っていう新しいカルチャーというかメディアを確立させちゃえば、あまり大きな歪みもなく、領域を横断できるのかなとなんとなく今日の会を通じて思いました。むしろ僕らがそっちの映画を見たい。

T　見たいですね！見ずに見たいですね！

K　殊更に説明しなくても、受け取れるように受け取れば良いっていう。受け取る情報は充分にあるから、過剰に穴がないように全部押し出す必要はないんだなっていうのがちょっと目から鱗でした。

T　つくるときは全部入れました。全部情報を入れて、あとは削っていく作業。聴いてもらってうるさいものとか、邪魔なものを削っていきました。

I　残ったものが洗練されているわけですよね。それだけでも成立するようにつくられていますもんね。

Y　治療院のところが一番ビジュアル的に来たので、それ以外のところは忘れてしまった。

K　そのガイドをつくるときに一緒だった視覚障害の人は、経験者だったんですか？

T　それこそ初めてだったので、視覚障害の人も初めて。

K　見えない人も同じように手探りでつくったってことなんですね。

T　実際のプロの方がつくっているときも、同じような感じって言ってました。つくった後で聴いてもらって、編集していく。

K　そのときに交わされるやりとりって、この言葉は要らないとかそういう話なんですか？

T　どんな風な情景が浮かびましたか？とか、今言っていることで伝わりましたか？と聞いていって、当たり前だけど盲の方でもそれぞれ受け取り方が違うので、凄く良くわかったっていう人もいれば、何言ってるかよくわからないっていう人もいて。どっちに寄せていくかっていうのを教えてもらいながらやりました。松田さんも、つくるっていう作業をプロじゃなくても色々な人とやってみたいって仰っていたので、もし機会があれば音声ガイドをまた作ってみたいと思っています。

Y　印象的なシーンがパって残るっていうのはやっぱり大事ですよね。見てても、こんなの見たっけ？ってことがあるので、ほとんどおぼえてないんですよ。でもそこでキーとなるところだけインプットしているんで、それができるっていうのが場面転換につながったりとか。だから今日ガイドを聴いて、よく考えられてつくられてるんだなって思いました。

O　なんていう映画でしたっけ、もう一度

T　鼻（び）とかけているんですけど、平仮名で『びじょ』っていう映画なんですけれど、もしかしたらアーカイブで残っているかもしれないですけど。去年上映会をしたときは、制作会社の人に連絡して貸してもらったんですよね。

I　全然違ったイメージだったりして。楽しみですよね。色調までなんとなく頭にあるけど。

Y　青っぽいかなって思ったんですけど。

K　私も青緑っぽい。

H　白白。

I　赤って色が出てきたので、対比のイメージをもったんですよ。つくること考えると際立たせるために。

Y　暗い感じで青っぽいイメージなんですけれど。

I　最初のリセッシュがピンク色っていうのが重要なんですけれど。

Y　俺、緑色！

T　やー、どうしよう、見たはずなのにスプレーの色はおぼえてない。色調は凄く豊かな映像でした。色によって伝えてることも多い感じで、服の色とかもわざと変えている。

I　非常に勉強になりました。美大の授業で『マトリックス』の音だけ聴かされて、どんな映画か絵を描けっていう授業があって、それを思い出しました。

T　まさにそんな感じでしたね！

K　今日は本当にありがとうございました！

（※1）『目の見えない人は世界をどう見ているのか』伊藤亜紗 著（光文社新書 2015）
（※2）『近藤幸夫 美術論集』（阿部出版 2019）
（※3）『ART SINCE 1900』ハル・フォスター、ロザリンド・E・クラウス、イヴ-アラン・ボワ他（東京書籍 2019）
（※4）音声ガイド：博物館や美術館などの展示物や、伝統芸能演劇の上演についての音声解説（説明）を、来場客に提供するサービス（Wikipedia より）
（※5）UDcast：スマホとメガネ型端末でアクセスするバリアフリー映画のシステム対応映画であれば、音声ガイドや聴覚情報（セリフ）を字幕にする字幕ガイドが利用できるアプリ
（※6）『目で見ない映画上映会』：2019 年 8 月に新潟市内で開催した自主上映会。映画を見たあとで、参加者同士が感想を筆談（声をつかわず）で会話する企画。
（※7）つっぺ：栓。びんの栓など。北海道の方言（goo 辞書 : 全国方言辞典）
（※8）『あなたの人生の物語』テッド・チャン 著（ハヤカワ文庫 SF 2003）